

第1回 小中学校の接続・連携に関する調査研究委員会の概要

◆日 時 平成29年8月3日（木曜日） 午後3時30分～

◆場 所 上杉分庁舎 12階 第1会議室

◆出席委員

氏名(敬称略)	所属 職名	備考
本 図 愛 実	宮城教育大学 教職大学院 教授	委員長
熊 谷 和 彦	東北福祉大学 教育学部 准教授	副委員長
佐々木 静 輝	仙台市立三条中学校 校長	
白 井 剛 次	仙台市立四郎丸小学校 校長	
永 見 幸 久	仙台市立柳生中学校PTA会長 仙台市PTA協議会 副会長	
高 城 み さ	仙台市立鶴が丘小学校PTA会長 仙台市PTA協議会 副会長	
佐 藤 慶 子	住吉台中学校区 学校支援地域本部 コンパス住吉台 スーパーバイザー	
安 藤 直 美	愛子・錦ヶ丘小学校 学校支援地域本部 めですこSCHOOL スーパーバイザー	

◆配布資料

- ・小中連携教育・小中一貫教育について（資料1, 2）
- ・本市の小中連携の状況と成果・課題について（資料3, 4, 5）
- ・平成28年度仙台市立小中学校における小中連携についての実態調査（まとめ・報告）
- ・平成27年度「中学校区・学びの連携モデル事業」実践報告書

◆会議の概要

1 開会 午後3時30分 （司会：田辺主幹）

2 委嘱・任命状交付

3 教育長挨拶

4 委員紹介

5 委員長・副委員長選出（佐々木委員が推薦）

6 委員長・副委員長挨拶（委員長：本図愛実委員 副委員長：熊谷和彦委員）

7 報告・協議

(1) 小中学校の接続・連携に関する調査研究委員会の概要について（資料1） 春日室長

(2) 小中連携教育・小中一貫教育について（資料1, 2） 丸山主任

- ・小中一貫先進校での教育課程の区切り，4・3・2はどのようにとらえたらよいのか（本図委員）…これまで6・3が基本であったが，小1から小6では大きな差があり，その6年間を見たときに，例えば自分を客観的に見るができるようになるなど，児童の発達段階や学習内容により，4年と5年の間には大きな差があり，このような区切りにより，4・3・2や3・4・2の区切りが出てきた。10歳の壁といわれることもあり，より子供の実態に合わせた対応ができる。（春日室長）

- ・義務教育学校は9年間の教育の中で4・3・2とか3・4・2など新しい東ねを作って，学校の特色を出してきている。（本図委員）

(3) 本市の小中連携の状況と成果・課題について（資料3, 4, 5） 丸山主任

- ・先生方の意識を改革しようということを目標として小中連携をはじめた。小学校と連携しながら，9年間で子供たちをどのように育てていくのか，そのために小学校・中学校の先生方が何をやっているかをお互いに知ることが大切なことであり，そのことは連携が難しい地域でも考え方は同じである。連携しやすい地域と同じようにできるのではないかと感じている。（佐々木委員）

- ・連携をしていく中で，子供たちの評価が高まっていき，地域の評価も高まっていく。学校が一生懸命行うことで，地域とのつながりも強くなっていく。中学生が小学生にいろいろな場面でお世話をしていく中で，小学生から中学生に感謝の言葉やお手紙で気持ちを伝えることができ，中学生はまたやってみようと思ひ，

小学生は自分たちの気持ちを受け取ってもらったと感じ、地域の人間関係が強まっていき、さらには生徒の自己肯定感も高まってきている。(佐々木委員)

- ・各中学校区で課題があり、その課題の解決のために小中連携を行う必要性を感じて行っている。地域の子どもたちを地域で育てようというのが柱である。学力の向上や基本的生活習慣を身に付けさせることを数年間かけて、小中で連携して行ってきた。子供たちが変わる姿を見て、保護者や地域の人々が動き出した。現在、新たな学びの連携を進めている。(白井委員)
- ・優秀な人材をはぐくみ育て、社会に出してあげたい。地域を盛り立ててくれるような、地域に根ざした人材の育成が大切である。横の糸、縦の糸のほか斜めの糸も大切にしたい。(永見委員)
- ・地域を大切にしていくことは外せない大事なこと。子供たちが成長する姿を見せれば、地域は益々協力的になる。課題と成果の中で、生活・学習状況調査では、中1になったときに自己肯定感や前向きさは一度上がるが、中2、3は下降気味になっていく、子供にとっては6・3の区切りは自分を一度リセットするチャンスであるかもしれない。豊里小中に伺ったときに6年生が育たないと聞いたことがある。(本図委員)
- ・6年生で卒業し、中学校に行きリセットできる。本校では高学年で一部教科担任制を導入している。あまりやりすぎると小5ギャップになる。学年の区切りを変えれば、そこにならずギャップはでてくる。4・3・2にすれば、取組が進むにつれ、4から3へのギャップが出てくる。永遠の課題である。(白井委員)
- ・どの学年でも自己有用感を高める取組はできる。6年生が1年生の面倒を見るという概念を小刻みにして、違った学年がそれぞれ一緒に活動することで、リスペクトやありがとうの気持ちが生まれる。(白井委員)
- ・ギャップは悪いことではない、それを乗り越える体験は大切なことである。ギャップの与え方が大事である。接続、接続とあまり環境を整備してしまうと、社会に出たときに乗り越える力にならない。(佐々木委員)
- ・学校教育は果てしがたい。やってもやっても終わりが無い。もっとこうすれば、この子をもっとよくできるのではないかと教員の良心が負担感・多忙感につながっている。新しい教育課程の中に「協働」という言葉がキーワードになっているが、カリキュラムマネジメントをしながら、一人の力で頑張るだけでなく、教員同士の力や他の力を上手に利用して課題に取り組んでいくことでより力が高まる。(熊谷委員)
- ・私のいる中学校区は地域との連携が強い地域、地域の方々が子供たちと関わる機会が多い。小中の関わりも普通にできている。夏休みには中学生が小学生に勉強を教えに来たり、高校生が地域の雪かきをしてくれたりしている。(高城委員)
- ・4・3・2の区切りは今の子供たちには合っているかもしれない。4年生の時に元気に声を掛けてくれた子供が5年生になると一歩おいて声を掛けてくるようになる感じがする。(佐藤委員)
- ・小学校の体力テストに中学生のボランティアがお手伝いをしてくれている。今年は地域ボランティア128名の中に中学生82名が参加した。参加した中学生は「小学生の時、シャトルランを走ってくれたお兄さん、お姉さんがかっこよかったから、お手伝いしようと思った」と話していた。小学生は中学生の姿を見て「中学生になったら小学生と一緒にシャトルランをやるんだ」と言っている。実際に中学生が頑張る姿を小学生が見ることがすごく刺激になっている。(佐藤委員)
- ・小学生のサマースクールに中学生が指導に来てくれている。中学生は「先生方の指導の大変さがわかった」と言っている。また、小学生は「中学生のお兄さん、お姉さんが来てくれるから参加する」と言っている子も多い。小中連携の活動は大人が思うよりも子供たちの心にいろいろなものを響かせていると感じている。(佐藤委員)
- ・意識的な段差は必要である。すべてなだらかな道にするのではなく、段差につまずいたときにどうするかが大事である。そのために児童生徒の心の筋力を育てる必要がある。小中連携が始まって、先生たちの声掛けが変わり、子供たちの行動が大きく変わってきた。(安藤委員)
- ・仙台市の小中連携と全国の状況を比べて、本市の良さや課題など特徴的なところはどこか。(熊谷委員)
- ・仙台市では小中学校の交流活動は活発に行われているが、学力調査等の結果を小中合同で分析し、学力向上の対策を考えていくような連携はあまり活発に行われていないことが課題である。(春日室長)
- ・9年間で育む子供像を共有し、小中連携に取り組んでいるところが仙台市の優れているところである。(丸山主任)
- ・学校間の小中連携だけでなく、学校支援地域本部等を生かした地域連携を絡めた連携が進んでいるところ

が仙台市の特徴である。(春日室長)

- ・地域支援本部が学校の要望に応じて、小学校で地域素材を総合的な学習に生かす取組を行っている。地域人材が授業プランを作成し、先生となって6年生に授業を行っている。その内容を学んだ子供たちが中学生になり、ボランティアで地域行事に参加することで小中連携の新しい学びが繋がった。(佐藤委員)
- ・社会に開かれた教育課程、小中連携を通したカリキュラムマネジメントになっている実践例である。(熊谷委員)

(4) 今後の予定(資料1) 丸山主任

8 閉会 午後4時45分

◆マスコミ：仙台放送、読売新聞

◆傍聴：なし

次回：10月31日(火) 15:30～教育局第2会議室

小中一貫教育の現状、視察報告等

平成29年10月31日 署名委員

本間 愛実

